

# 1. 長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品

高橋美久二（資料課長）

## 1. はじめに

長岡京市今里四丁目で昭和54年度に外環状線街路改良工事に伴う長岡京跡の発掘調査が行われた結果、既に削平されていた古墳が検出された。この今里車塚古墳と名づけられた古墳は古墳時代中期の盾形周濠を有する大形前方後円墳で、後円部直径47m、全長75mに及ぶものと推定された。古墳は、長岡京時代に前方部と後円部の間に南北方向の西二坊大路が造られ、墳丘の一部が削られ、周濠の一部が埋め立てられた。さらに前方部は早く削平されて家が建てられ、後円部も昭和初年には完全に削平され、調査着手の時点では古墳とわかる徴証は何も残されていなかった。

この古墳の調査で最も注目されたのは、特異な外部施設であった。それは、後円部の墳丘裾に葺石の根石に沿って約4m間隔に立てられていた柱とその付近の周濠底から出土した笠形木製品である。この今里車塚古墳の概要と特異な外部施設である柱と笠形木製品については既に報告したとおりである。<sup>(注1)</sup>この笠形木製品はその後保存処理が行われ、当資料館の古墳時代のコーナーに常設展示さ

れ、多くの人の注目を集めている。

今回この木製品の樹種同定を京都大学木材研究所の林昭三先生にお願いし、その報告をいただいたのを機会に、再報告しその後の調査成果や最近知り得た資料をあわせて検討を加えてみたい。

## 2. 柱と笠形木製品の概要

墳丘裾に埋め込まれて立てられていた柱根は、最下段の葺石の根石に沿って、約4m間隔で立てられていた。その柱の掘方が根石の下に広がっていることから、柱は盛土後、葺石設置までの間に立てられていることがわかる。この柱根には、大小あり、それが一本間隔で建てられ、大柱（No. 1. 3. 5）は径15～20cmあり、いずれも心去り材で面取りが施されていた。一方小柱（No. 2. 4. 6）の方は径5～12cmで丸太の皮をむいただけの心持材であった。この柱根は昭和54年度の調査で大柱3本小柱3本を検出した。

笠形木製品はいずれも周濠底で出土したものでこれも大小2種類ある。大形の笠形木製品は、木目と直角方向に幅広い楕円形を呈し、径54.6～57.0cm、厚さ19.8cmをはかる。木取りは横木の木



図1 今里車塚古墳の柱根と柱材

表を上面にして円板をつくり、上面を半球形の笠形に加工し、下半に厚さ5cmの台部をつくる。台部の側面には全周で22面の段違いの面取りを行なう。笠部の中心に9.5cm×13.5cmの方形の貫通孔をうがつ。下面は、周囲に幅約8cmの平坦部を残し、深さ13cmにすり鉢状に抉り込む。表面は全体に木目方向に無数のひび割れができ、そのひび割れが風化して異様な形を呈する。下面の平坦部はあまり風化していないことなどから、笠部を上にして永く風雨にさらされていたことがわかる。

小形の笠形木製品（No.49.50）は、いずれも断片であり、表面の風蝕が進んでいるため全形を推定することが困難であるが、おおよそ次のように推定される。それは、径30cm前後、高10cm前後に復原される円板の上面を半球形の笠形に加工したもので、大形のものに比べ台部の垂直に立ちあがる部分をつくらない。中央に方形の貫通孔があったかどうかは確かめられないが、存在していない可能性がある。下面の抉り込みも存在したかどうかは不明である。木取り、風蝕の状況等は大形のものと同様である。

これらの柱と笠形木製品の性格等については、その概要を昭和54年度の報告で推定した。それは笠形木製品のうち大形のは、木製蓋で柱はそれを支えた台であったこと、小形のものはいわば鳥形木製品の一部である可能性があり、いわば古墳の表面を飾る外部施設として「木製の埴輪」ともいふべきものとして、図4のような復原図を描いたことがあった。<sup>(注2)</sup>

その後、昭和56年度に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの発掘調査によって、今里車塚古墳のくびれ部の調査が実施され、さらに大形柱3本、笠形木製品1個が検出された。<sup>(注3)</sup>特に注目されたのは、前方部側の柱の外側に接して、幅48cm、厚さ3cmの板が立てられていたことである。この板材は基部の部分の高さわずか22cmしか残っていなかったが、木製の埴輪の盾のようなものであったことが想定されている。

昭和54年度の発掘調査で検出された柱4本及び笠形木製品3点について、今回材質同定をお願い

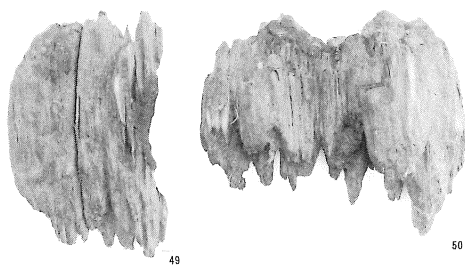
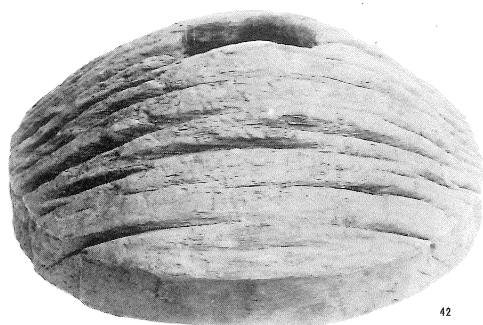


図2 今里車塚古墳の笠形木製品

し、その結果については、別項で報告されるとおりである。この柱と笠形木製品いずれもが、コウヤマキであった。このことは、出土状況から推定された柱と笠形木製品がセットとして考えられるべきものであることの可能性を裏づけるものである。

次にこの今里車塚古墳出土資料と同様の木製柱や笠形木製品を検出した資料をあげて比較検討してみたい。

### 3. 笠形木製品と柱の出土例

今里車塚古墳出土の笠形木製品と同様な木製品が出土したのは、大阪府応神陵古墳<sup>(注4)</sup>、奈良県石見遺跡<sup>(注5)</sup>、埴口丘陵（飯豊陵古墳）<sup>(注6)</sup>、黒田大塚古墳<sup>(注7)</sup>などである。

応神陵古墳出土例は、明治14年3月8日に拝場の50間東の隍中から出土したもので「木輪」と報告されたものである。直径74.2cmをはかる大形の笠形木製品で、今里車塚古墳の大形の笠形木製品に形状は酷似する。報告者の若林氏は「恐く祭器

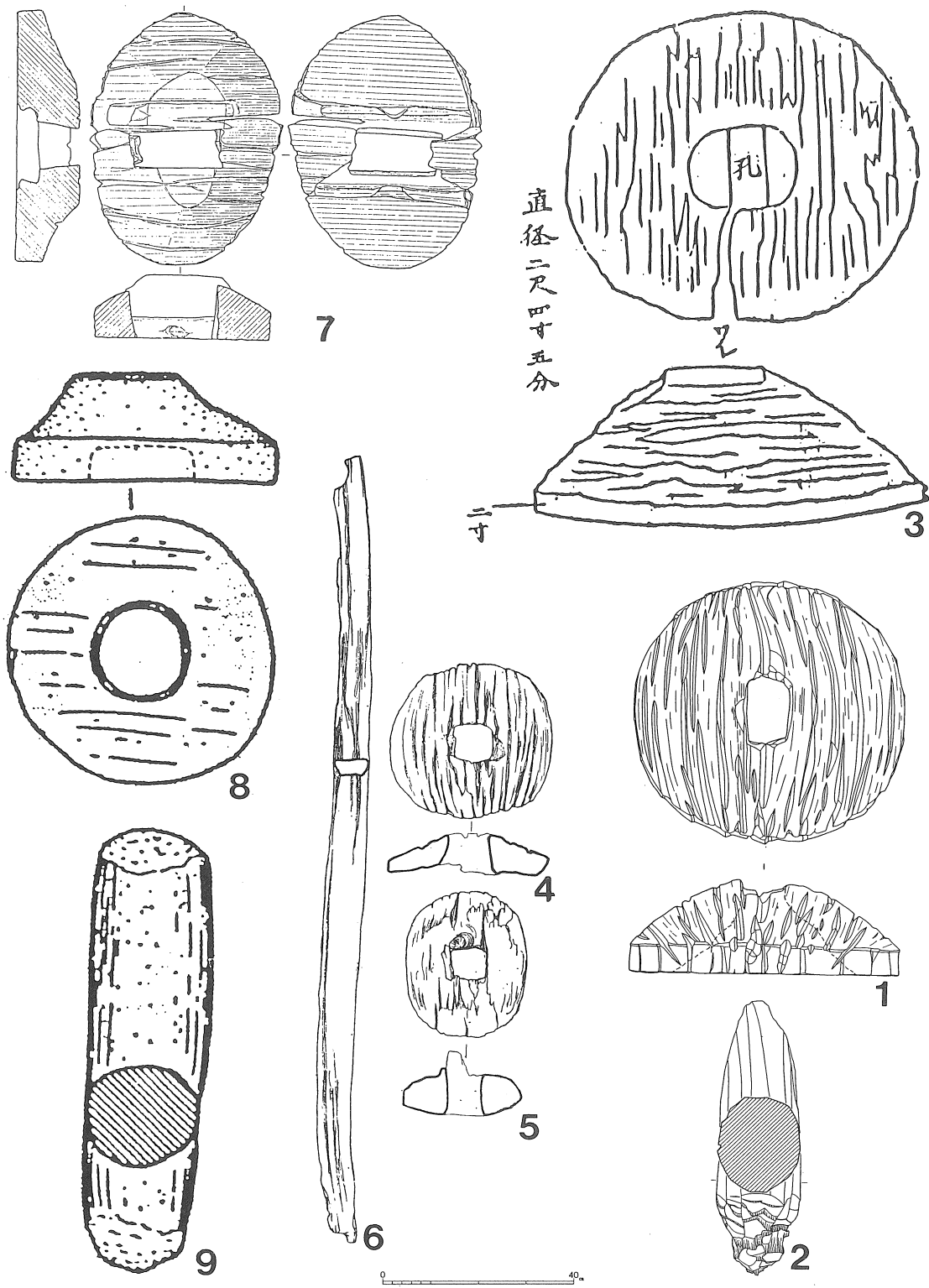


图3 笠形木製品等集成图 1·2—今里車塚古墳 3—応神陵 4·5·6—石見遺跡  
7—埴口丘陵 8·9—姫ノ城古墳

等の台にてもあらん、或人は陵土に樹てし柱の笠ならんとの説をなし」と当時既に台説と笠説の二説がとなえられていたことがわかる。当時報告されたものはほぼ完形品であるが、現在菅田八幡宮に所蔵されている応神陵濠中から出土したと伝える笠形木製品は半分だけのものである。土生田純之氏の教示によると材質はコウヤマキで、大きさは長88.0cm、現存幅58.0cm（推定復原幅94.0cm）、厚23.0cmのものであるとのことである。

石見遺跡出土例は、昭和6年、昭和41年の発掘調査で溝状遺構から多種、多量の埴輪に伴って「方孔円板」と報告された笠形木製品及び「木片」と報告された柱状のものがあった。さらに昭和41年の発掘調査では「鳥形木製品」と報告されたものも伴出した。笠形木製品は、径30cm前後、厚さ10cmのやや小形のものであるが、今里車塚古墳の大形の笠形木製品に似ている。これらの木製品について、報告者の末永氏は「円形木板は平面なる部分を下にして、水平に位置するを常としていた等の如きは、元来此等を墳丘上或は丘側に於て埴輪との間に配し、或種の方法即ち方孔に木を挿して一種の傘状にするか、又はこの円形板を礎石の代用的な用に充てて中央の方孔に木を建て、而して之を何か埴輪の列立と関係せしめたものであったとすることも考へられるのである」とし、又さらに「この木板等を埴輪と同等価値、或はそれに準じた表飾に要する材料として取扱ふことの代わりに、埴輪製作中の一過程を分担するものとして取扱ひ、例えば方孔のある円形板の如きはこれを一種の製作品として考えることも不可能ではない」とし「円形木板の如き、同形にして大小異った二種の品があるらしい点も、埴輪製作に要する器具と解する場合に都合のよい」としている。このように笠形木製品の用途について三種類の方法を想定し、結論は保留されている。

埴口丘陵のものは、前方後円墳の後円部の外堤に近い周濠底から、昭和54年2月に出土したものである。「有孔木製品」と報告された笠形木製品は長径53.5cm、短径41cmの楕円形をなし、厚さは中央部で13.5cm、縁部で6cmある。木取り、風蝕

の状況、形状いずれも今里車塚古墳の大形の笠形木製品に似ている。材質もコウヤマキと報告されている。報告者の土生田氏は「用途は不明であるが」「安定した形状や、中央部に柄孔を有する点等からみて、何かの台座として使われたものであろう」としている。

黒田大塚古墳のものは、前方後円墳の周濠内から、昭和58年8月に出土した。正式の報告書に接していないが、笠形木製品は径43cm、高さ14cmあり、上部に12cm四方のほぞ穴があると報告されている。さらにこれに伴って、石見遺跡出土の鳥形木製品と同様な木製品で鳥形の頭部にあたるものが出土していると報告されている。笠形木製品は今里車塚古墳の大形の笠形木製品によく似ている。発掘担当者の河上氏はこれを台として使用したものと推定していると報道されている。

笠形木製品として知られるものは以上であるが、笠形木製品に似たもので、古墳から出土するものに石製品がある。

その一つは、奈良県新山古墳から出土した石製模造品の中で「燭台形石製品」<sup>(注8)</sup>または「台座形石製品」<sup>(注9)</sup>と呼ばれて報告されたものである。これは径15.8cmと16.2cmに高さそれぞれ5.4cm、5.2cmの2点があり、中央に方形の穴を穿つこと、平坦な下底面から垂直な立ちあがり部分のある台部をもつことなど笠形木製品に似たところがある。しかし、上面の笠形部分に3段の削り方を加えた段をもつことや中央の穴が貫通していないこと、下面に挟り込みがないこと、木製品を模造した石製品にしては今里車塚古墳にみられるような、下半部の周囲に面違いの段をもたないことなど異なる点も多い。

もう一つは、熊本県姫ノ城古墳の石製品で、<sup>(注10)</sup>「石製蓋」と報告されているものである。これは径約57cm、高さ約23cmの円錐台形をした笠形の石製品に下面のほぞ穴に入る径25cm、長130cmの柱がとりつくものである。穴の下は土に埋め込まれるように尖らせてある。下面のほぞ穴が貫通していないことなど、笠形木製品との相違点もあるが、柱との組みあわせなどを考えると今里車塚古墳の

笠形木製品と共通するところも少なくない。

さて、次に古墳から検出される木製柱または、柱穴について類例を求めてみたい。

古墳から出土する柱について最も早く注目されたのは、奈良県欽明陵古墳周濠内から、明和8年(1771)に出土したものである。これは『書紀集解』の著者河村秀根・益根が、『日本書紀』推古天皇27年10月条に欽明天皇陵に各氏が競って大柱を建てたが、倭漢坂上直が樹立した柱が最も太く高かったとされている坂上直の建てた柱に凝して紹介したものであった。この時出土した柱がどのようなものであったかは知る術もないが、大きい柱が出土したことだけは事実であろう。

また兵庫県五色塚古墳からは、前方部及び後円部の墳丘東側の中段テラス部分に柱穴が検出され、大阪府玉手山9号墳では前方部第一段テラスで円筒埴輪と柱穴が1本おきに並んで検出された。また岡山県両宮山古墳の前方部濠の周堤からは、3.9m間隔で2本の柱穴が検出されている。さらに、先の石見遺跡では笠形木製品や鳥形木製品に伴って多数の柱が倒れた状況で出土しており、奈良県石塚古墳でも周濠底から柱が検出されている。

#### 4. 笠形木製品の性格

以上みてきたように、笠形木製品と木製柱の古墳出土例は、少ないとは言え古墳に伴うものであることは確実である。しかも、笠形木製品のうち材質同定のなされた今里車塚古墳、埴口丘陵、応

神陵のものはいずれもコウヤマキであった。コウヤマキは、『日本書紀』神代上に「槇は以て顕見蒼生の奥津葉戸に將ち臥さむ具にすべし」とあるように古くから葬送の具に使用すべき材として知られていた。事実当時コウヤマキの採取可能であった近畿地方の木棺の材質の判明するものの多くがコウヤマキである。このように、笠形木製品および木製柱は、出土状況や材質の点からみて、土製の埴輪と同様に古墳の外表面を飾る「木製の埴輪」であったといえる。

笠形木製品の用いられ方として、古来から柱の上に置いて笠のように飾る考え方や物を立てる台としての考え方があることは今まで述べてきたとおりである。とくに今里車塚古墳のように、柱と笠形木製品がセットで検出され、しかも柱はしっかりと埋め込まれていた事実を考えあわせるなら、笠形木製品が台として使用されていたとは考えられない。笠形木製品をまねて石製品としたと考えられるものに2種類があることは前述のとおりであるが、明らかに台座とされた新山古墳例より柱の上へのせられた姫ノ城古墳例に笠形木製品は近い。また笠形木製品のうちで、最も遺存状況の良好なものは、今里車塚古墳の大形のものである。この形状をよく観察すれば、蓋を形どったものであることは明瞭である。それは、笠部の下の垂直な立ちあがり部分の周囲が面違いの段になっていることで、これは明らかにスカートのヒダのようになった布を表現しているもので、しかも笠部が

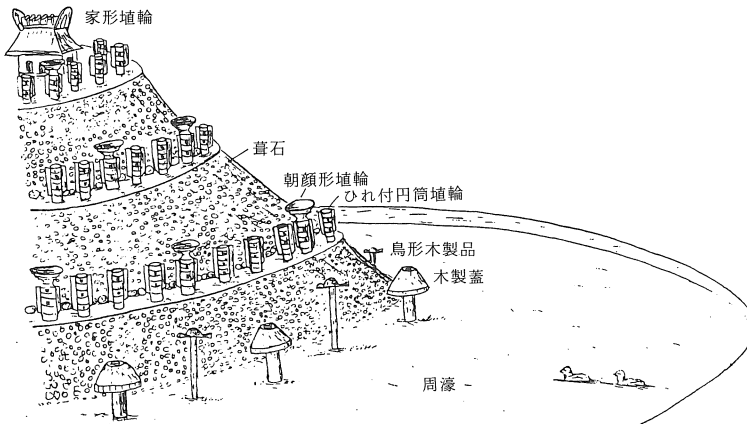


図4 今里車塚古墳後円部復原模式図

台部より若干外側になって廂状になっているのは、この布が笠の周囲に吊り下げられていたことを示すものと考えられる。これは明らかに天蓋を模したものとみられる。ただ、頂部の方形の穴については、その用い方を推定することが困難であるが、蓋形埴輪のような四方に広がる立飾りをつけるための装置かと考えられる。これに対して、今里車塚古墳の小形の笠形木製品については、蓋でないことは確実であるが、成案はない。あるいは、石見遺跡のような鳥形も考えられるが、今後の良好な資料を待ちたい。いずれにしても、今里車塚古墳で1本おきに大小の柱が交互に立てられていたことや、玉手山9号墳で円筒埴輪と木製柱が交互に立てられていたことでわかるように、「木製の埴輪」にも各種のものがあり、その立て並べ方も一様ではなかった。さらに今里車塚古墳では盾形木製品かと考えられるものも立てられていた。

## 5. おわりに

今里車塚古墳の笠形木製品と柱について、再報告し、類例を求めて比較検討してきた。結果は、さきに概要を報告したように、古墳の外表面を飾る木製品で、土製の埴輪と同様に用いられる「木製の埴輪」とも呼ぶべきものであろうと考えた。そして、その後の資料を加えて検討した結果、さらに前説を補強しようと考えた。今後この「木製の埴輪」の例は増加すると思われる。土製の埴輪とともに用いられたこの「木製の埴輪」の林立する様は、従来の造営当初の古墳のイメージを大きく変えるものであろう。今後の資料の増加が望まれる。

この笠形木製品については、今里車塚古墳の発掘調査以来多くの方々の教示を得た。とくに、有光教一、井藤暁子、近江昌司、金関恕、金子裕之、木村泰彦、白石太一郎、竹下賢、辻本和美、土生田純之の各氏には新資料や文献の教示等をいただいた。厚く感謝したい。

(注1) 高橋美久二・竹原一彦他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会, 1980)

(注2) 高橋美久二「昭和54年度乙訓地方発掘調査の概要-長岡京以外-」(『長岡京』17号, 長岡京跡発掘調査研究所, 1980)

(注3) 石尾政信「長岡京跡右京第84次発掘調査概要(7 AN I T T-VI地区)」(『京都府遺跡調査概報』第3冊, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1982)

(注4) 若林勝邦「古墳より発見せる木片に就て」(『考古学会雑誌』第11号, 1897)

奈良県立考古博物館『古墳と陵墓展』(1974)

(注5) 末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13冊, 1935)

奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館『特別展古代人のいのり』(1977)

(注6) 陵墓調査室「昭和53年度陵墓関係調査概要」(『書陵部紀要』第31号, 1980)

(注7) 『京都新聞』1983. 8. 19(『月刊文化財発掘・出土情報』1983・10所収)

奈良県立橿原考古学研究所『大和を掘る-1983年度発掘調査速報展-』(1984)

(注8) 梅原末治『佐味田及新山古墳研究』(1921)

(注9) 宮内庁書陵部『出土品展示目録石製品, 石製模造品』(1982)

(注10) 小田富士雄「石人石馬の南限と北限」(『古代史発掘』7, 1974)

(注11) 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳復原整備事業概要』(1975)

(注12) 安村俊史『玉手山9号墳』(『柏原市文化財報告1983-I』, 1983)

(注13) 河本清「両宮山古墳周境確認調査報告」(『岡山県埋蔵文化財報告』10, 1980)

(注14) 橿原考古学研究所『纏向』(1976)